

本学では、海外大学との交換留学・学術交流を推進するため、積極的な協定校との連携に取り組み、留学制度の充実を図って世界中に学生を派遣、また世界中から留学生を受け入れている。派遣については、学生への安全管理指導をはじめ、大学として学生の海外派遣にかかる危機管理体制を整えたうえでのプログラム実施を徹底している。

交換留学では、24年春秋合わせて約350人の学生を35カ国に派遣した。地域別の学生数については、協定校数の最も多いヨーロッパが最多で、19カ国で約170人が留学している。また、昨今の円安や物価高騰の影響を受け、経済的な負担を軽減できるアジア地域への関心も高まり、9カ国で約35人の学生が学んでいる。

さらに、スイスのGeneva Graduate Institute (GI) との3+2プログラムで

は、2人の学生が、交換留学生としてGIでの修士1年目を開始し、また、本学の推薦をもって提携大学に出願できる海外大学院特別進学制度を利用した本学卒業生2人が、この秋学期より米国コロンビア大学大学院に進学した。

他方、留学生の受け入れについては、春学期に36カ国から渡日した472人が在籍し学修に励む傍ら、在学生からなる交換留学生サポーターとの交流や、英語落語、明治神宮参拝ツアーなどの日本文化体験を楽しんだ。8月に開催されたオープンキャンパスでは、「上智大学に來ている留学生と話してみよう」の企画に参加し、英語のみなら

ず、本学で学習したばかりの日本語を使い、来場した受験生との対話に臨む姿も見られた。春学期終了をもって一部の学生は帰国したが、継続して在籍する留学生に加え、秋学期には新たに36カ国から366人を受け入れる予定だ。

海外短期留学プログラムにおいては、23年から全面的に渡航を再開した。24年夏期休暇中は海外短期語学講座11件、海外短期研修6件、実践型プログラム6件に計307人が参加した。また、就業・実務体験を通じて、グローバル社会の中でどのように大学での学修成果を活用するかを学ぶ、グローバル・インターンシップ科目の実習先



オープンキャンパスの企画では留学生が活躍した

27件に、計46人の学生が参加した。グローバル教育センターでは、グローバルな学びの更なる促進のため、様々なプログラムの提供や多方面での支援を続ける。一方、世界情勢は常に不安定であるため、留学希望者は、引き続き日本および滞在予定国の感染症や治安面のリスク、自身の語学力や危機管理対応能力の有無も慎重に見極めながら留学計画を立てることが不可欠との自覚を持ったうえで、多様な留学機会に積極的にチャレンジしてほしい。

サマーセッション開催 37の国と地域から159人が参加

6月28日から7月19日の間、海外学生向け短期プログラムSummer Session in East Asian Studies2024を実施した。

24年度は37の国と地域から159人の参加があり、日本の文化、社会、経済、歴史などに関する13科目と日本語基礎コースの計5科目が開講された。日本文化体験イベントでは、茶道体験、明治神宮参拝、寿司作り等を体験し、有意義な機会となった。プログラム終了後のアンケート回答では、「忘れがたい一生ものの経験ができた」、「講義の質が高かった」、「期待以上の素晴らしい体験ができた」など多



例年人気のポップカルチャーのクラス。数の声があり、好評のうちに幕を閉じた。

同様に海外学生向けに1月に開催するJanuary Session in Japanese Studiesについても、対面による実施を予定している。

グローバル教育センター からのお知らせ

【2026年春期休暇以降のプログラム募集について】

交換留学は10月3日に25年秋の渡航開始分の学内選考願書受付を終了した。今後、11月、12月の学内選考を経て、年内に派遣学生を決定予定。25年2月、3月(春期休暇中)の海外短期プログラムは、10月中旬に各プログラムの説明会(対面)を実施、10月、11月に申込受付を行う。申込を希望する学生は、説明会出席のうえ、参加を検討のこと。次年度実施プログラムについては、25年4月頃に公開される募集要項を確認すること。

グローバル教育センターからの情報

は、Loyola掲示板を「留学」で検索すると確認できる。大学プログラムのお知らせをはじめ、海外の協定校からオンライン講座(上智での単位はなし、無料/有料)や、オンラインでの学生交流機会の案内等がある場合も、随時Loyola掲示板で案内している。グローバルな学びに興味のある学生は、ぜひ定期的な確認を。

【留学カウンセリング】

本学では常駐の留学カウンセラーが留学に興味のある学生を対象にカウンセリングを実施している。1枠あたり30分の完全予約制で、本学学生なら誰でも利用可能。大学の制度に関する質問のほか、将来の留学に向けた疑問点や留学全般の相談も可能なので、積極的に活用してほしい。



留学カウンセリングについてはこちら

体験談 交換留学

「イギリス・エディンバラ大学」 山本 凜々花(総グ4)

初めての留学であるエディンバラ大学での経験は、学業面において最も厳しい挑戦でしたが、同時に人生の転機とも言える貴重な体験となりました。



留学当初は、英語でのタスク処理能力の不足や、日本語と英語の論文作法の違いに直面し、非常に苦労したため、友人や教授からの助言を仰ぎつつ、愚直に課題をこなしました。結果として、春学期には、心に余裕が生まれ、論理的な文章を作成する力が向上し、納得のいく成績を収めることができました。この過程を通じて、困難を乗り越える気力が自己成長に繋がることを深く実感しました。

また、学業以外の活動として、Salsa Societyに参加し、ラテンダンスを学ぶ機会を得ました。これにより、学年や国籍、職業、年齢を超えた多様な人々との交流が生まれ、視野が大きく広がりました。この活動は、単に学業のストレスを和らげるだけでなく、一生の友人を得る機会にもなりました。異文化や新たな挑戦に対してオープンであることの重要性を、この経験から学びました。

今後は、この留学で得た学問的知見を卒業論文に活かし、悔いのない成果物を制作したいです。また、留学で培った多様な視点をもとに、住みよい社会実現の道を模索していきたいです。

体験談 実践型プログラム

「インドの社会経済・人間開発に学ぶ」 原田 想大(経営3)

24年度春学期の実践型プログラム「インドの社会経済・人間開発に学ぶ：南インドのケララ州を実例に」に参加しました。



ケララ州は、収入が比較的少ないにもかかわらず、インドで高水準の人間開発を達成した州です。この開発モデルを中心に、座学とフィールドワークを通じ、医療や教育、ジェンダーなど多角的な視野からケララの人間開発について理解を深めました。

特に印象に残ったのが、ケララの分権化についてです。村で草の根レベルの意見をまとめて上位の行政に反映するシステムが、多様なバックグラウンドを持つ住民を取り残さずまとめる役割を果たしていると学びました。

プログラム前半と後半の最終日には、各々の担当テーマについてプレゼンテーションを行い、学習の成果を発表しました。日印の比較を行うことで、現地の教授や学生に日本のことを教えるのみならず、私たちの社会における課題点を改めて見出す機会となりました。

また、現地学生との交流も非常に有意義な体験になりました。フィールドワーク後の意見交換や、日本との共通点や相違点を話すなかで双方で知識を深め合うことができました。

今回の経験を活かして、将来は海外とのビジネスの現場をつなぐ人材になりたいと考えています。

体験談 3+2プログラム

「スイス・Graduate Institute」 シナバーガー 英利佳(23年国教卒)

Geneva Graduate Institute (GI) が2022年に新設した「国際関係開発学」の修士過程で、グローバルヘルス(国際保健学)を専攻しました。WHOをはじめとした国際保健関連機関の中核であるジュネーブでは、学内外でイベントやワークショップが日々開催され、机上での学びだけでなく、実務者の視点や多様な考え方を知る機会にも恵まれました。



プログラムの一環であるApplied Research Projectでは、都市部における感染症抑制と緊急時の対応力向上に関する政策をUN Habitatと共に提言し、また、学内の国際保健センターでは、治療薬のイノベーションとアクセス双方の改善に向けた研究を行いました。同センターでは、学内のイベントの他、外交官や国際機関職員を対象とした国際保健外交セミナーの企画・運営にも携わり、日本の国際保健外交戦略に焦点を当てた修士論文の執筆に大いに役立ちました。

人間の生活基盤である保健分野、特に国際保健の専門家になるというキャリア目標がこの2年で明確になり、大学院在学中のご縁や巡り合わせもあいまって、卒業後は同国際保健センターの正規職員として採用されました。これからも保健と政治・外交を結ぶプロフェッショナルを目指して邁進し続けたいと思います。